

ロマンス諸語音変化の説明における アドホックネスについて

On adhocness in the explanation of Romance sound changes

原 誠

Makoto HARA

0. 初めに

筆者は東京外国語大学の大学院外国語学研究科において、合計12年間にわたって「ロマンス諸語比較研究」を担当し、ロマンス諸語の音変化をつぶさに見てきた関係上、ロマンス諸語のうちのある言語が話されている特定地域の一部分に起こった音変化を説明するのに、その特定地域の一部分にしか適用できない非常にアドホックな説明を用意することに何かいわれの知れないやましさ、あるいはうしろめたさを感じてきた。つまりそれは、たとえ同様の音変化がかなりの距離を置いた他の地域で起こっていても、上記特定地域の一部分に適用した説明を適用しない、言い換えれば、それは両地域にわたって同一の原因で起こったとは限らないので、両地域にまたがる統一的な説明は避ける ということを意味する。この統一的説明回避は原、1981の「二つのジレンマ」のうちの第2番目のジレンマを形成している。従ってアドホックな説明に頼らざるをえないということになるのだが、これはこれではたしてそんなことで良いのだろうかという疑問に突き当たる。いずれにしてもジレンマである。以下にそういった例を七つばかり登場させてみよう。

1. 西ロマニヤ（高地アラゴン方言を除く）における母音間破裂子音の軟音化現象

1. 1. 西ロマニヤにおける軟音化現象

レト・ロマン語、プロヴァンス語、フランス語、カタルーニャ語、スペイン語、ポルトガル語の6言語からなる西ロマニヤのロマンス諸語では、構造主義がメジロ押しの形でものの見事に具現している好例を見ることができる。つまりラテン語の母音間破裂子音 -P-, -T-, -K- の軟音化現象がそれである。いま -P- に例をとってこれを説明すると、

(1) CAPPA > capa (カッパ, マント)

二重子音の単子音化

(2) CEPULLA > cebolla (玉ネギ)

隣接母音への同化による単子音の有声化

(3) BIBERE > beber(飲む)

有声破裂音の摩擦音化

(3') RIVU > rio (川)

有声摩擦音の消失

というふうに、いずれにおいても見事な軟音化が起こっている。これをまとめると、

-PP- > -P- > -B- > -β - (> φ)

というふうに、右から始まったか左から始まったかはいまは論議の外に置くとして、きれいなメジロ押し現象（連鎖反応）が-T- と-K- についても起こったのである。この現象の説明には、西ロマニヤにはその昔ケルト族が足跡を印したことがあり、彼らの話していたケルト語の軟音化現象が西ロマニヤの俗ラテン語に影響を与えたとするケルト語基層言語説が有力である。

1. 2. Martinet, 1952

この論文の p.217 には、

“しかし西ロマニヤのこの音変化を最終的にはケルト語の影響によるものと解釈する有力な論拠があることは明らかであるに違いない。”

と書かれている。

1. 3. Jungemann, 1955

この書物の、この件に関する結論は p.152に出ている。それはA.からE.までの五つの小結論から成っており、この場合差し当たって D. と E. とはいまの我々には無関係、その上 A. は「ケルト語の消滅より有声化はずっとあとのことだ」としており、C. は「西ロマニヤの広汎な地域にわたってケルト語の基層言語化は起こっていない」と主張していて、反ケルト基層言語説を形成している。従って B. のみがケルト基層言語説にとって有利な結論となる。

“大陸ケルト語の母音間破裂子音は、西ロマニヤの広大な地域におけるローマ化と時を同じうして弱まっていったのだろう、そしてケルト語とラテン語との2言語話者は、ケルト語の母音間破裂子音に対しておこなったのと同じようにして、ラテン語の母音間破裂子音をも弱化させたのかもしれない。”

いかにも Jungemannらしい、良く言えば中庸を得た態度、悪く言えばどっちつかずの折衷的態度である。

1. 4. 原, 1981

筆者は原, 1981においてこれらのケルト基層言語説に反対を唱えた。その論拠は五つある。

1. 4. 1. 年代のズレ

ガリヤへの俗ラテン語の定着の時期と、軟音化の開始の時期との間には少なく見積もっても 400年ものズレがある。

1. 4. 2. 東ロマニヤにも軟音化現象は起こっている

Alarcos, 1965 はその p.244において、La Spezia-Riminiの線の南に位置するトスカーナ地方において喉音化現象が起こっていると述べている。

例：a kkasa (< AD CASA)

la hasa (< ILLA CASA)

Bustos, 1960もそのp.123で、イベリヤ半島についてだけであるが、「イベリヤ半島で軟音化が始まった地域はケルト族によって占領された地域外である」と述べて基層説を否定している。

またLausberg, 1965もそのp.349で、

“§ 362. 西ロマニヤと東ロマニヤの境界に関しては、アペニン山脈中の境界線を越えてイタリア中央部にまで及び、さらに南イタリアの諸方言が話されている地域の北半分にまで達する数多くの弱化現象（軟音化，有声音化；気音化，摩擦音化）があることに留意されたい。”

と述べている。

1. 4. 3. 軟音化と u > üとの関連

Wartburg, 1952はp.52ff. においてフランス語の uの前方音化をケルト基層言語説に帰せしめているが、もしそれが正しいとすると、軟音化が起こった地域と uの前方音化が起こった地域とが一致してよいはずである。

1. 4. 4. 基層言語の影響を考うる歴史的・文化的・社会的事情

西ロマニヤ各地にもたらされた俗ラテン語に対してケルト語が基層言語としてはたらくような歴史的・文化的・社会的事情が果たしてあったのであろうか。軍事的または政治的に考察すると、おそらくは基層言語の影響の可能性はないであろう。軍事的に、または政治的には、ローマの方がケルトより圧倒的に強かったのであろうから。

1. 4. 5. 大陸ケルト語の実体不明確

Fowkes, 1940, Gray, 1944, Maniet, 1963, Fowkes, 1966等の労作のおかげで、大陸ケルト語の実体がある程度明らかにされてきたとはいえ、未だその実体は不明確であり続けている。にもかかわらず、Martinet, 1952はブリテン諸島のケルト語に基づいて、ガリヤの俗ラテン語に対する大陸ケルト語の影響について論じているのであるから困ったものである。

1. 5. ジレンマ

それではケルト基層言語説に拠らないとすると、いかなる説明に依拠するか。普通行われているのは西ロマニヤではラテン語に本来備わっていた軟音化の傾向が作動したのだという説明である。なるほど西ロマニヤの事情だけ考えているぶんにはこの説明の説得力は

たしかに高い。しかし東ロマニヤではなぜそういう軟音化の傾向がはたらかなかつたのかとたずねられると答に窮する。これがこの種のアドホックな説明の一大欠点である。

2. 方言学と通時的構造主義

2. 1. Catalán, 1962

§ 2.の標題がCatalán, 1962のそれである。この論文の中でCatalánは、ラテン語の/L-/と/PL-, KL-, FL-/の、レオン方言における五つの変化結果を取り上げる。ちなみにカスティーヤ方言では、/L-/はluna(月)におけるように無変化であり、/PL-, KL-, FL-/は、PLORARE > llorar(泣く)、CLAMARE > llamar(呼ぶ)、FLAMMA > llama(焰)におけるがごとく、口蓋化している。これは本来ならカタルーニャ語やポルトガル語におけるがごとく、/L-/が口蓋化し、後者の語頭3子音群がそのままであるはずなのだが、カスティーヤ方言の場合、後者が口蓋化したので前者は口蓋化せずにそのまま残って、語頭における/l/と/ʎ/との対立を保ったという構造主義的説明がなされている。しかしCatalánは彼お得意のレオン方言を例にとり、なるほど中部レオン方言の一部では/L-/:/PL-, KL-, FL-/の対立を、/ĉ/(ĉ = ts) : /y/(半母音yの破擦異音)として保ち、西部レオン方言では/ĉ/:/č/(č = tʃ)として、あるいは/ʎ/(硬口蓋・側面音) : /č/として保ってはいるものの、他方では東部・中部・西部にわたって両者とも/ʎ/で混同してしまったレオン方言もあり、また中部および西部にまたがる一部の方言では両者とも/ĉ/に合一させてしまっているから、両者を区別しないレオン方言は構造主義的説明に対する重大な反証を形成していると言う。

2. 2. Alarcos, 1965

上のCatalánの主張にはAlarcos, 1965の反論があり、彼は、

“従って、D.カタルンによれば、提起された説明(筆者注:L- > ʎ-となるべきところ、PL-等が口蓋化したので、L- > l-のままであったという説明)は無効ということになる。しかしながら、二つの実現が、ある地域で(対立を失って)合一するという事実は、他のすべての地域でも弁別しようとする意図が無視されることを意味することは無い。”(p.251)

と言って、Catalánに反論を加えている。しかし筆者は、一方で音素論的対立が失われる地域があるがために、その対立を保っている地域に適用される構造主義的説明の説得力が弱められることだけはたしかだと思ふ。

3. ラテン語の語末の -s

たとえばラテン語のNOS(我々)は、サルジニヤ、プロヴァンス、カタルーニャ、スペイン、ポルトガルの諸語でもnosであり、レト・ロマン語の一種であるスルセルヴァン方

言では *nus*, フランス語では *nous* (現在この *-s* は発音されていないが, 12世紀までは発音されていた) というふうに, 西ロマニヤでは語末の *-s* はそのまま保たれた。しかし東ロマニヤを形成するルーマニヤ, ダルマチヤ, イタリアの諸語では *noi* というふうに母音化している。東西ロマニヤを二分するこの有名な現象に対する識者たちの説明はどのようなのであろうか。

3. 1. Wartburg, 1952

Wartburgは上記西訳書 (Manuel Muñoz Cortés 訳) の p.34 ff. において, ガリヤおよびスペインにはローマの上層階級が植民したから *-s* が保たれた, これに対しイタリアおよびルーマニヤにはローマの下層階級が植民したから *-s > -i*と変化したという珍妙な説明をしている。この説明の不合理なことは一目瞭然である。すなわち下層階級が植民した地域では必ず音変化が促進されるのであろうか。もしそうだとすると, ポリビヤやパラグワイにおいて /*ɲ*/ 音が残存していることが説明できなくなる。また文法の面でも古い *vos eo* が中南米各地に残存していることも説明できない。さらに § 1. の「西ロマニヤにおける母音間破裂子音の軟音化現象」について Wartburg はケルト基層言語説を採用した以上, 同じ西ロマニヤにおけるこの *-s* の保存についてもケルト基層言語説を採用すべきではなかろうか。はたして大陸ケルト語の *-s* は残存して西ロマニヤの俗ラテン語の *-s* をも保存せしめたのであろうか。

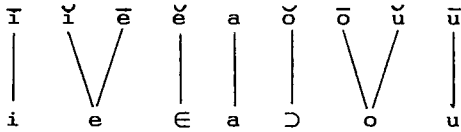
3. 2. Politzer, 1947

これに対し, Politzerの説明はより *clever* な感じがする。すなわち彼はロマニヤ各地にそれぞれ個別的事情を認めたのである。ルーマニヤ語やイタリア語では, 音声学的に言って, 先行位置にある強勢が語末の母音を弱め, その結果語末母音は自らのみならず, もちろん語末の *-s* すらも支えることができなくなったと言う。しかし語末の *-s* を支えられなかったから, それは母音の *-i* に変わったのであろうか。たしかに語末で /*-s*/ と /*-i*/ とが混同されたという点ではこの説明は成り立つかもしれない。しかし *-s* は弱化の結果 *-i* に変わったと純音声学的に言えるのであろうか。これは相当に疑問である。さらに, Politzerはフランス語の *-s* の保持 (12世紀まで) についてある説明を, スペイン語とサルジニヤ語については別の説明をそれぞれ加えているが, 東西ロマニヤが *-i : -s* ということでこれだけ截然と二分される以上は, Politzerの説明とは裏腹に, よりグローバルな統一的説明をこの現象に対して加えたいくなるのは人情であろう。しかしながら *-s* の残存についての統一的な説明および *-s > -i* の変化についての統一的な説明がそれぞれ可能となったとしても, 各説明のアドホックネスは依然として残るであろう。

4. 西ロマニヤ共通型の母音

Alonso, 1962はその pp.5-6 において、ロマニヤ各地における古典ラテン語の母音体系の変化結果を、6種類に分けているがいまそのうち本章に関係ある西ロマニヤ共通型だけをここに掲げる。

西ロマニヤ共通型



この「西ロマニヤ共通型」の成因について以下の三通りの説明がなされている。

4. 1. Weinrich, 1958

Weinrichの主張の特徴は、母音の長短を子音の長短に結びつけた点にある。古典ラテン語には母音・子音の長短について4種類の組み合わせがあった。すなわち、

- (イ) 短母音 + 短子音・・・RŎTA (車輪)
- (ロ) 短母音 + 長子音・・・GŪTTA (滴)
- (ハ) 長母音 + 短子音・・・SŌLUS (単独の)
- (ニ) 長母音 + 長子音・・・STĒLLA (星)

がそれらである。ところがラテン語の初期からロマンス諸語分化の時代にかけて、これら4種類の組み合わせを2種類に減らそうという傾向が観察されている。その際消滅したのはもちろん(イ)と(ニ)である。残った(ロ)と(ハ)においては母音と子音とのいずれの長短が音韻論的に関与的であったかという点、それは子音の長短であった。母音の長短は非関与的になってしまったのである。そうするといかにもサルジニヤ語的母音体系が全ロマニヤにおいてできあがりそうなものであるが、実際はさにあらず。むしろサルジニヤ語的母音体系が成立するのを避けようとする反作用が起こり、ŷはēに、ŭはōに合一してそれぞれeとoになった。また ěとōはそれぞれɛとɔとになった。かくして4段階の開口度をもった母音体系ができあがるのである。

4. 2. Haudricourt & Juillard, 1970

彼ら二人は古典ラテン語にもともと存在していた三つの二重母音に注目する。このうちOEは ē > e となり、AUは ō > o となったから問題ないが、あとの一つ AE は ē̄ となった。このような開母音で長母音の ē̄ はそれまでの古典ラテン語には存在していなかった。ここからラテン語母音体系の再編成が始まる。すなわち ē̄ がまず ě とペアを組み、そこではみ出した ē̄ は ŷ と組んで e(:) となる。それと平行して ō も ŭ と組んで o(:) となる。この状態にあってはもはや母音の長短よりも開口度の方が音韻論的機能を果たすことになり、上の括弧の中に入れて表示した長音記号は消えてしまう。このようにして結局

は(A)の「西ロマニヤ共通型」の母音体系に達する。

4. 3. Spence, 1965

Spenceはまず Haudricourt & Juillard, 1970を槍玉に挙げ、 $AE > \bar{e}$ の変化が母音体系全体に影響を及ぼすことはないだろうとして一蹴する。次に Weinrich, 1958の説については、

(i) Weinrichはまず「長母音+長子音」の組み合わせが消えたとしているが、実は事実としてこの組み合わせはのちのちまで残っていた。

(ii) Weinrichの考えているこの諸変化の時間的順序に難点がある。むしろ母音と子音の結合の単純化は母音体系における「開閉の別」の発展よりもあとに起こったと想定する方が事実にはマッチするようだ。

の2点を挙げて論破し、自分の対案として、母音の長短から開閉への移行の説明については構造主義出現以前の説明を、構造主義的見地から再検討する値打ちがあるとする。その構造主義出現以前の説明とは次の2点のうちのいずれかかまたは両方を強調するものである。

(i) 短・長母音を開閉の別に変えていく過程の進行の結果、ある母音どうしの融合(西方ロマンス語では \bar{e} と \bar{y} , \bar{o} と \bar{u} の融合)が起こった。

(ii) 一方では強勢のかかった短母音の引き伸ばしを、また他方では強勢のかからぬ長母音の長さの短縮を条件付けたところに見られるように、新しくできた強さのアクセントの果たした役割は大である。

母音の開閉の違いはまず最初に短長を区別する機能体系の範囲内で自由変異音的なものとして発生し、過渡的な「短長+開閉」の時期を経たのちこれら開閉の違いを基にして母音体系が再編されたと仮定すべきである。

以上が Spenceの説であり、筆者としてはこれが最も穏健なのでこれを支持したいというのが偽らざるところである。

4. 4. (B) から (E) までについての説明

§ 4.3.の Spenceの説明によって(A)の成立経緯が説明できたとしても、ここにはその詳細について紹介しなかったけれども、(B), (C), ルーマニヤ語, (D), (E)についてはそれぞれ別々の説明を用意せねばならなくなる。しかしここでも説明のアドホックネスの度合いはさしたるものではなくなる。つまり Alonso, 1962の p.7には古いものから新しいものへと、(B) > ルーマニヤ型 > (A)と並べられると述べられているから、あとはルーマニヤ型の近辺に (C), (D), (E)を配置すればよいことになる。

5. F- > h- > \emptyset

筆者はこれまでこの音変化現象を、イベリヤ半島北部について ①最小努力の法則 ② [f] : [v] は無声 : 有声のペアをなす (つまり v が不安定ならそれとペアをなす f も不安定。Vice versa) ③バスク基層言語 の三つの要因を挙げて説明してきた。ところが清水, 1988は, 「ラテン語からカスティーヤ語にかけて語頭を強め, 語内を弱める傾向がある」という Malmberg, 1952 の一般則に基づいて, もしこの一般則が正しければ (清水も筆者も正しいと思っているのだが), ①最小努力の法則 はこの一般則に反するから ①は排除すべきであると主張した。学部4年生の卒業論文によって筆者は一本取られた形になった。そこで③を①のところへ置いて, ②はそのままというふうに, 筆者は考えを変えざるをえなかった。ところが Haudricourt & Juilland, 1970 の p.72 を見ると,

“Orr は, 語頭における /f > h/という変化を物語るガリヤ・ロマンス語とロマンス語のいくつかの地名を調べ上げている”

と書かれており, さらにその直下に, Meillet, 1928 の p.171からの文章が引用されている。

“F- > h- が起こった代表的な地域としてのイベリヤ半島・ガスコーニュの他にも, 以下の地域でも同現象は起こっている。すなわち, ラテン語時代の地名に同現象が起こっている広大な地域 (フランス北部と東部), 特殊な用法のある語 FORIS (筆者注: 扉とか門を意味する) の昔の発音に F- > h- が現れているより広大な地域 (フランス北部と東部, レティヤ, イタリア北部), (カラブリア地方は考慮に入れないまでも) 気音化が存在する狭い地域 (ベルガモ山岳部), ロマニヤの中でも最も古い地域の中で, 現代の口語が, 昔に起こった F- の気音化によってのみ説明されうる諸事実をその特徴としている狭い地域 (サルジニヤ東部) がそれらである。” (p.171)

カスティーヤ語とガスコーニュ語以外で起こった F- > h- をどう説明するか。まさかバスク基層言語説を持ち出すわけにもいくまい。Haudricourt & Juilland, 1970 の p.73には Orrの説明が引用されていて, それによると, 「(気音化は) ラテン語の俗っぽい発音」とのことである。やはりここでも個々別々にアドホックな説明を用意せねばならないのだろうか。

6. /θ/ > /s/

これはスペイン・アンダルシア地方の一部および中南米のスペイン語に起こっている現象で, 一般に seseoと呼ばれている。常識的には /θ/ と /s/との対立がその機能負担量が比較的小であるため両音素が合一したと説明されているが, それでも cocer(煮る) : coser(縫う) とか, caza(狩猟) : casa(家)等の重要な最小対立がある。機能負担量による説明は, /θ/ と /s/ との対立を残しているカスティーヤ地方についての説明を

不自然なものにしてしまう。

7. /k/ : /y/

同様に、上記2音素の対立が前者の機能負担量が小のために失われて /y/ だけになる yeísmo という現象がスペインおよび中南米の大部分に広がっている。例えば olla(鍋) : hoyo(穴) の対立がなくなるのである。これには [k] 音が音声学的にいささか不安定であることも影響しているかもしれない。現にこの音素はフランス語からは消えてしまっている。今やスペイン語からも消え去ろうとしている。しかしポルトガル、カタルーニャ、プロヴァンス、イタリアの諸語には厳として残っている。やはりここでもアドホックな説明をせねばならないのだろうか。

8. 結びに代えて

以上見てきたように、ある地方の音変化の原因を説明するのに、ある説明を持ち出すところが別の地方ではそれと非常に対立的な現象（その最も極端なケースは不変化）が起こっていると、前者に対する説明はどうしてもアドホックになりがちである。コセリウ、1981a のように音変化の原因の説明をしないですますのなら、筆者のように苦しまないですむが、彼とても「目的性」ということばを用いており、これは筆者にとっては原因の説明をしているのと同じことになる。

しかし同じアドホックネスでも、§ 2., § 4., § 6., § 7.のそれはその程度が軽い。なぜならば、§ 2.のレオン方言の場合はあい対立するラテン語のペアが両方とも変化しているか、両者が合一しているかだからである。両方とも変化していれば、Alarcos, 1965 ふうに両者をあくまでも弁別しようとしたとするしかないし、合一の場合は両者の対立の機能負担量が小であるという説明を持ち出すしかあるまい。また § 4., § 6., § 7.の場合は変化の年代的順序が判明しているので、これまた多少のアドホックネスは残るものの、説明はさして困難ではない。

しかし § 1.や § 3.のように、ペアの一方が不変である場合、変化した方の説明はどうしてもアドホックになる。また § 5.の場合はイベリヤ半島とガスコーニュ地方の気音化の原因の説明があまりに容易で明快なために、ロマニヤの他の諸地方に散発的に起こった気音化の説明にかえて困ってしまうのである。結論にならない結論であるが、筆者の場合ロマンス語学における音変化の説明の際のアドホックネスに永年やましさを感じて現在に至っている。そうしてみると、コセリウ、1981b の p.68に出ている、

“音韻に関する規則は音韻変化の起きた地域に認められ、起きなかった地域には認められないというだけのことである。”

という言は、Alarcos, 1965 の p.251 の言と同様に意外に正鵠を射ているのかもしれない

のである。またサビア, 1957のp.151 に出ている,

“それ(筆者注:方言分化)は二つまたはそれ以上の集団が十分分離して, 別々に互いに独立して駆流し, 一緒には駆流しないに至ったために起こる。”

という言とか, ソシュール, 1972のp.109 に出ている,

“時間は万物を変遷せしめる。”

という言とかは, 一見何も説明していないように見えるが, それでいて実は意外に(と言っては失礼だが)真理をついているような気がしてきた。

参 考 書 目

- Alarcos, Emilio. 1965. *Fonología española*⁴. Madrid: Gredos.
- Alonso, Dámaso. 1962. *La fragmentación fonética peninsular*. *Enciclopedia lingüística hispánica I. Suplemento*. Madrid: C.S.I.C.
- Bustos, Eugenio de. 1960. *Estudios sobre asimilación y disimilación en el ibero románico*. Madrid: C.S.I.C.
- Catalán, Diego. 1962. *Dialectología y estructuralismo diacrónico*. *Miscelanea homenaje a André Martinet*. 3.69-80.
- コセリウ, エウジェニオ; 田中 克彦 & かめい たかし共訳. 1981a. *うつりゆくこそことばなれ*. 東京: クロノス.
- コセリウ, E.; 柴田 武 & グロータース, W. 共訳. 1981b. *言語地理学入門*. 東京: 三修社.
- Fowkes, Robert A. 1940. *The phonology of Gaulish*. *LANGUAGE* 16.285-299.
- Fowkes, Robert A. 1966. *English, French and German phonetics and the substratum theory*. *LINGUISTICS* 21.45-53.
- Gray, Louis H. 1940. *Mutation in Gaulish*. *LANGUAGE* 16.285-299.
- 原 誠. 1981. *ロマンス語学における二つのジレンマ*. 「東京外国語大学論集」31.1-30.
- Haudricourt, André & Juilland, Alphonse. 1970. *Essai pour une histoire structurale du phonétisme français*². The Hague-Paris: Mouton.
- Jungemann, Frederick H. 1955. *La teoría del sustrato y los dialectos hispano-romances y gascones*. Madrid: Gredos.
- Malmberg, Bertil. 1952. *Occlusion et spirance dans le système consonantique de l'espagnol*. *Mélanges de philologie romane offerts à M. Karl Michaëlsson*. 356-365.

[Palavecino, Edgardo R. 訳. 1956. Oclusión y fricación en el sistema consonántico español. Estudios de fonética hispánica. 51-65. Madrid: C.S.I.C.]

Maniet, A. 1963. Le substrat celtique dans les langues romanes. Les problèmes et la méthode. TRAVAUX DE LINGUISTIQUE ET DE LITTÉRATURE 1.195-200.

Martinet, André. 1952. Celtic lenition and Western Romance consonants. LANGUAGE 28.192-217. [Martinet, 1955 の第11章 La lénition en celtique et les consonnes du roman occidental]

Martinet, André. 1955. Economie des changements phonétiques. Berne: Francke.

Meillet, Antoine. 1928. Esquisse d'une histoire de la langue latine. [筆者未見であるが, Haudricourt & Juillard, 1970のp.72. に出ている。]

Politzer, Robert L. 1947. Final -s in the Romania. THE ROMANIC REVIEW 38-2.

[Anderson, James M. & Creore, Jo Ann. 1972. Readings in Romance linguistics. The Hague-Paris: Mouton. pp.414-422]

サビア, エドワード; 泉井 久之助訳. 1957. 言語. 東京: 紀伊国屋書店.

ソシュール, フェルディナン・ド; 小林 英夫訳. 1972. 一般言語学講義. 東京: 岩波書店.

清水 (現姓 細川) 実佳. 1988. スペイン語における語頭のF- > h- > ø の変化について. 「東京外国語大学1987学年度卒業論文」.

Spence, N.C.W. 1965. Quantity and quality in the vowel system of Vulgar Latin. WORD 21.1-18.

Wartburg, Walther von. 1952. La fragmentación lingüística de la Romania. Madrid: Gredos.

Weinrich, Harald. 1958. Phonologische Studien zur romanischen Sprachgeschichte. Münster: Aschendorff.